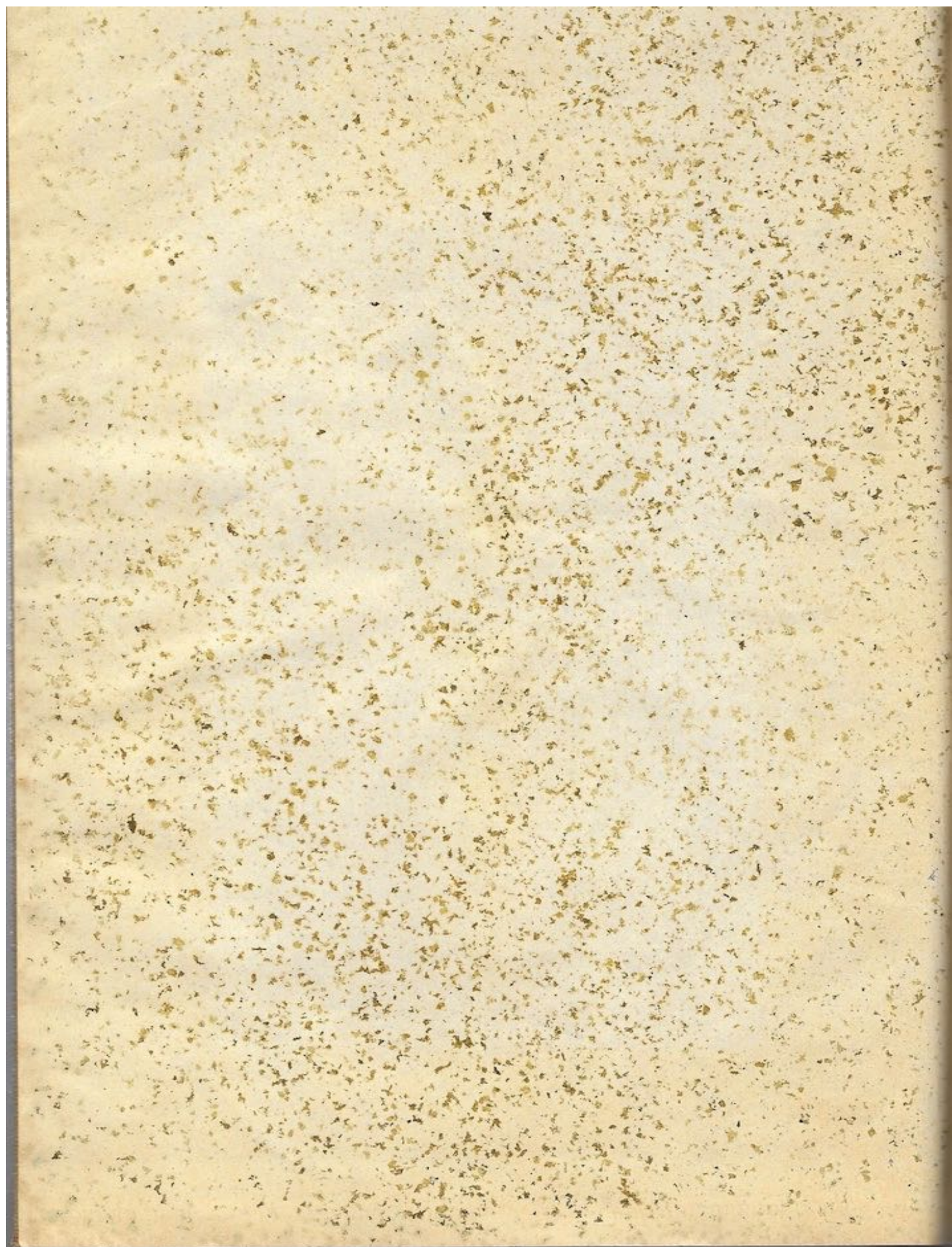


合氣道

卷之壹



合氣道

卷之壹



道 主 近 影

序文

合氣は神の御姿御心より出で尊善美なる無限絶対の世界御創造 御經綸の精神なり

夫れ武術は百事神と人との合氣より言靈表現の誠を以て基準となし誠の心即ち大和魂を更に体に練及し誠魂の練磨統一と其の魂を以て肉身の統一を計り心身に寸隙なき心魂一如の統一を以て誠の人を作るを目的とす

更に稽古の徳に依りて天地の眞理を悟り練現し天地經綸のため天地の呼吸と呼吸に依り世の様を腹中に修め治国破邪顕正の道を講じ正しき身魂一如の誠を現はし其の術たる一を以て萬に当るを知り以て世界萬有の教導となり世界萬有を和するを本旨とするものなり

世相の崩展と人の心の進むにつれて武術は常に光鞭をつけて崩展するもの

なれども此の書を見て練磨するに於ては知らず知らずの中に此武道の真意を
悟り眞の達人となるものなり

乞ふ此の書は教授を受けしものゝ爲に又入門者に対しゆるしとして渡すも
のなれば切磋琢磨の日を重ね極意を得益々奥の技に進み教を受くべく茲に一
言依頼する次第なり

以て序文となす

道主識

首締め	胸袖	両袖	袖	肩	横面	正面	り業	習上の心得	後業	四手元取り	三肩	二横面	一正面	業	立業	合気道歌	目次
二九	二八	二七	二六	二四	二三	二一		一九		十四	十三	八	七	五			一頁

技

座練法後

技合

立法気

植芝康悦

道道

主主
述

合氣道歌

一 天地人和樂の道の合氣道大海原に生ける山彦

一 合氣にてよろづ力を働かし美わしき世と安々和すべし

一 ありがたやいづとみづとの合氣道雄々しく進め瑞の御声に

一 惟神天地のいきにまかせつゝ神のこゝろをつくせ丈夫

一 武術とは神の御姿御心ぞいづとみづとの御親学し

一 神習ふ道のしぐみは惟神合氣の道や伊都能賣の神

一 声もなく心も見えず惟神神に向はれて何物もなし

一 声も見ず心も聞かじつるぎわが世を創めたる神に習ひて

- 一 氣のみわがたまの志づめやみそぎわがみちびきたまへ天地の神
- 一 魂のあが破れ衣をとりのぞき天の運化に開き光れよ
- 一 己が身にひそめる敵をエイと切りヤアと物皆イエイと尊け
- 一 つるぎわが筆や口にはつくされず言ふれせず悟り行へ
- 一 奇びなる合氣の道のおんじぐみ熱も光もおのが心に
- 一 又しても行詰るたびに思ふかないづとみづとの有難き道
- 一 古より文武の道は両輪と稽古の徳に身魂悟りぬ
- 一 誠をば更に誠に練り上げて躰幽一如の真諦を知れ

- 一 まよいなば悪しき道にも入りぬべし心の駒に手綱ゆるすな
- 一 向上は祕事も稽古もあうばこそ極意のぞむな前を見えたり
- 一 教へに打突く拍子さとききけ極意の稽古表なりけり
- 一 叫びさます一人の敵も心せよ一を以て萬に當るや丈夫の道
- 一 左右をば切るも拂うも打捨て、人の心はすぐに馳せゆけ
- 一 ふりまはす太刀に目付けて何かせん拳は人の切るところたれ
- 一 ありとある太刀を習いて何かせん唯一筋に思ひ切るべし
- 一 すきもなくつきつけたる敵の太刀皆打捨て、踏込んで切れ

一 敵人の走り来りて打つときは一足よけてすぐに切るべし

一 右手をば陽にあらわし左手は陰にかえして敵をみちびけ

一 敵多勢吾をかこみて攻むるとも一人の敵と思いた、かえ

一 立ちむこう劍の林を導くにこだては敵の心とぞ知れ

一 太刀ふるい前にあるかと襲い来る敵の後に吾は立ちけり

一 丈夫の敵に向ひしそのときは萬法すべて文あやとなりとぐ

一 惟神合氣のわざをきわむれば如何なる敵も襲うすべなし

一 惟神身魂は合氣即つるが研け光れよ現世うつしよの内

技法真隨

立業

一正面

右或は左手にて打込みの事

手刀を以て（或は拳）相手を打つ術天地の息と自分の息とは同じものである筈だから動作も陰陽合致の業を手刀に及ぼして打込む。

斯く打込んで来る相手に向つてはいつも自分の心に相手を包む様な雄大な気持で対すれば相手の動作を見抜く事が出来る。そこでそれに合して右或は左に体をかはす事も出来る。又相手を自分の心に抱き込んだら自分が天地より受けた所の道に相手を導く事が出来る。例へば打たすべく見せてそれに従つて相手に打込ませ左或は右に除けて相手を倒す事が出来る。生死の境を超越しいかなる事に臨んでも九分九厘敵の圧迫を受けて死地に入つても明らか
に道を求むる事が出来る。是等の事を心に置いて鍛練しなければならぬ。

古は兵法を狭き畳の上で道により天地の意氣を以て斗ふ呼吸を対照的に練磨したのである。此の場合適當の距離をとる。これは丁度斯道で言へば水月の理即ち相手との距離を水の位とし一あたらぬ場合一それを彼我の体的靈的の距離を中に於て相對す。相手火を以て攻め来うば水を以て防ぐ相手を打ち込ますべく誘つた時は水が始終自分の肉身を圍んで水と共に動く。即ち相手が打つて来れば水と共に崩くから打ち込まれない。すべて打込むにも打ち込まれるにも此の眞理と合した呼吸で行はなければならぬ。これを修めば智仁勇自ら出で来り眞一つの^{だいわん}大和魂になり全身合氣ともなり又是れ無我の境に入る事が出来る。すべて斯道は悟りから悟りへと肉体に美しい精神の國を建設する事が出来る。大にしては天下國家を和し小にしては一身を修む。結局大和魂の練磨である。又岩戸崩きの行である。且つ人の心は天地を司るものなれば是の天地水火陰陽の理に想を馳せ練磨することを肝要とす。

二 横 面

手刀を以て相手の横面もしくは相手を斜に肩口より切り下す氣持で打つ。

相手は先方の出来を知つて先方の氣を誘ひつゝ左足を軽く引き先方の氣を抜き其の機を逸せずして先方の右（或は左）の手首を左手前に引き掴み右手を持添へて左足を大きく踏み込み右に転じつゝ陰陽の息で先方を右前に投げる。つまり出合頭の兵法でありたくみに地区地物を利用しての技法である。そこで上中下三段に分れての法があるがこれは稽古に際して傳ふるものとす。

劍法で言へば左足を引きながら八双に振りかぶつて切り降す際その水月の理をよく考へて其の劍を使へなり様に真正面に切り込む。又劍法として八双から左に引く所の左に切り降す切り方を習ひ同時に左足を踏み込みつゝ右に切上げる所の劍法を習ひ又同時に体を転じて後の敵を切り拂ふ。この四つの劍法を習ふ爲に横面打ちの技が定められた。

三 肩

之は單に肩とつかむことは普通ばんやりしている相手の肩をとるのは容易であるが相對したよでとることは至難である。そこで相手に目かくしを加へつゝ左手又は右手で肩をとる。

肩をとられる場合はそれに乗じ目かくしをうたれざる様に左手で拂ひのけ相手が引いたうそれに乘じて右で面をうち左で水落をうつて右後に倒す動作である。

この武術に於て特に注意を要することは心と体及び力が全く一致して統一しなければならぬ。力は体と心の合致でこれが歩に働かおげならぬ。

もし相手が左手にて自分の肩を取り引よせながら頭上目がけて打ち込んで来た場合には速かに右拳を以て相手の面を打ち左拳を以て相手の右手を拂ひ相手の右手首を両手にてつかみ速かに左足を前に進め体を転じて相手を後方

に投げるべし。

(普通は左が陽で右が陰であるが働の場合は逆になる)。

凡て力は動・静・解凝・引弛・分・合とより成立つ所の道理を神習ひ日々の稽古に身体に魂こめて画き出し肉体を練磨して始めて武道になる。

肩をつかみに来たらずれば剣を八双に振りかぶり肩より斜に切りおろすか又は足を切るつもりで切りつけると思ひながらなさねばならぬ。先づ八双にかぶつて肩口に向かつて切つて来る時又は大上段に振りかぶつて切りかゝつて来る時には肩そのもの、精神で相手の剣を誘ひ右足同時に進めて相手を打倒すか左足引いて倒す。

昔剣法に皮を切らして肉を切り肉を切らして骨を切るといふ法があつた。之は切りかゝる剣の下に泰然とて皮を切らして同時に相手の肉を切つた術であつたが今日では皮を切らすさへ惜しむ。たとへ皮でも切らすとはつま

り自身を傷つけ又は危くすることになるからそれではならぬ。自己の身をよこなはぬ様にして相手を倒さねばならぬ。即ち心で導けば肉体を傷つけずして相手を倒すことが出来る。

導即倒といふ工合に斯道を練り上げねばならぬ。皮を切らして肉を切る法は名人の法であるが非常に危険な方法で日本人の爲すべきわざではない。

いつも安全な破れざる位置にあつて相手を倒す。つまり皮をも損せずして相手を服させる。この覚悟が斯道の稽古に最も必要である。

更に一歩進んで相手の乗ずる隙なからしめる様充分練磨しなければならぬ。相手が肩を掴むと同時に相手の面をうづて左足を一歩進め相手の右拳を掴んで前にねじ倒すのはすべて心の働でなす。心を体に画き出すから心の通りにゆく。体を練るのであるがその裏は心を練るのである。相手の肩を掴んでひんにもこの心をもつてなすから相手もそれに乗じてくる。即ち術は心の表現

である。先方の心中に相手の肩を引くといふ心が起つた時に既にその心が當方に分るのが肝要である。又心で自分の肩を相手に取らうべく導くのが合氣の一つの術で之が分つたら相手を倒すのは容易である。然し之は心で分るだけでは何もならぬ。此の道理を体の上に分り実現しなければならぬ。それが即ち斯道の稽古である。

武道には エイ ヤー トー ハッ 等の掛声がある。この四つに限らず日本人が言葉に出せるだけの掛声がある筈である。

天地の呼吸に合し声と心と拍子が一致して言魂となり一つの武器となつて飛び出すことが肝要で之を更に肉体と統一する。声と肉体と心の統一が出来始めて始めて技が成り立つのである。靈体の統一が出来て偉大な力を稽更に練り固め磨き上げて行くのが武術の稽古である。斯くして中くと剣で切るべく仕向けることが分り又世の中の武術の大氣魂がその稽古の場所及び心身に及ん

で練れば練る程武の氣魂が集りて大きな武術の太柱が出来る。柳生十兵衛も塚原ト傳もあらゆる方の達人名人の魂が全部集り来り又武術の氣も神のめぐみによつて全部集り来るの理を知り稽古に精魂をつくすべし。

この人向に與へられた所の言葉の魂を肉身と一つにして日々稽古して天地の呼吸と合致せねばならぬ。或は時には「エイ」と切り、「ヤア」と受け「ト」とはなれる。これは同じ力の者同志は隙がない時には「ト」とはなれることが出来るが一方に隙があれば「エイ」「ヤツ」と切られてしまふ。

古はかく「エイ」「ヤツ」と合し「ト」とはなれ又「エイヤ」と結ぶ。そこにお互に隙のない様練磨を重ねて行つたのである。かくの如く熱心に稽古の度を重ねるに至うば相手と対した時に未長手を出さぬ内に既に相手の倒れた姿が見える。そこでその方向に技をかけると面白く投げられる。技は熱心になればかくなるものと信じて練磨すべし。

四 胸元取り

相手が胸元をもつと同時に右手で面左で相手の左腕を打ち深く左足を相手前方に踏み込み同時に両手を添へて左肩で押し氣味で前方へ倒す。

胸元をとられるのは槍で突いて来るか又剣を青眼にかまへて突いて来るのと同じ道理である。胸をとつて引くのと突くのとがある。第一に胸元を相手にもたすということは相手の心をこちうへ引きよせることで相手を導いて置いて体をかはす。突いて来た時には相手の突く氣持を利用して左足引いて体をかはし左後方に投げる。又胸元を持つて引く時は引かすべくつかませて其の引くにまかせて進め前方に倒す。胸元に相手の注意力を集めさせ引くといふ虚に乗じて倒す。故に稽古の場合引かすべく胸元を持たせ同時に相手に体の変更をさせる暇を與へず右で面を打ち左で腕をたいて倒す。遂には持たせず相手の心を知り自分の心で持たせて相手を誘ひ投げる様になる。

五 手 頸 を 撼 む 事

手と足と腰の心よりの一致は心身を守るには最も必要な事で殊に人を導くにも又導かれるにも手によつてなされる。一方で導いて置いて一方で倣す是を良く理解しなければならぬ。相手が引かうとした時には先づ相手をして引く心を起さしめ引かすべく仕向ける。術の鍛練が出来て来ると相手よりも先に相手の不足を満足さすべく、こちらから相手の隙即ち不満の場所を見出して業をかける。此の相手の隙を見出すのが武道である。

眞の武道は敵を殲滅するだけでなく其の敵対する處の精神を敵自ら喜んで無くなさしめる様になさねばならぬ。

和合の爲にするのが眞の武道即ち合氣道である。地上に表はれたものと其の精神とが一如となつて和合する様に日及の稽古を爲すべし。手頸を取りに来たならば左足引いて取うんとする手をもつて相手を導き一方の手をもつて

首へ打ち下ろす。支那の敵は殲かれて後已むといふが殲れても尚やまず盛んである。初志を貫徹してやまぬといふ氣持でなければならぬ。殊に斯道を鍛練するものに於ては人は生通しの理を悟うねばならぬ。日本の武術は皆天地の敵を盡き出すもので。例へば無敵の槍でとりまかれ、おし進んで来た時と魚もそれを一人と看なしてなす。古人の如く後に柱や樹木を小楯にする事は相違つてゐる。進んで来る敵の心を小楯に其の真正面に立つて突いて来る槍の真中心に入り身轉換の法に依つて無事に其の圍みを破つて安全地帯へ出る。斯く周圍を全部敵にとり巻かれた時と雖も入り身轉換の法に依つて破れざる姿勢で敵を圧迫しなければならぬ。

此の道理をよく没んで体に書き出して稽古すべし。大勢の時は一人と思ひ一人の時は大勢と思ひ常に一を以て萬にあたる積りで隙を與へない様にする。單に一人と一人の切り合ひでなく天地の經綸の爲になすのが斯道の稽古である。

る。心身に寸隙なき大和魂の誠を作り上げ上中下三段前後左右の敵を誠入身
轉換法合氣により心より服させざるの心技橋古が必要である。心ゆるすな。

神の心を人の肉体に建設する。闇を照破する光の如く更に深く橋古を
精まねばならぬ。

古人の極意の書に「太陽の光りが襖を開けるといつ入つたともなしにさし
入る。武術もさうでなければならぬ」と書いてあるが、そんな事ではいけな
い。襖でも壁でも岩でも何でも照破して通り抜けろ様な光でなければならぬ。

後業

(一) 後捕は肉体の魂に五体を身備せる一人格の働をなす様に武術の練習をする。後に対するの精神を敏感に働かすのが目的である。いつ後から捕りに来ても後に目つけてゐて心の怠が全身に用かれ不意の襲撃に逢つても早速後が靈体一致して敏活な働きをなさねばならぬ。後から擲むといふ事は捕る方も非常に危険が伴ふものである。それは相手の虚をつくといふ事が心に油断を與へるからである。故に不意に思はぬ不覚をとる事がある。大いに注意を要する処である。たとへ相手が向ふを向いてゐても己れより腕が上の時は相手の体には後に武術の精神が充実しているから却つて危い。後をとうれは時には左右にかはして直ちに相手に対する。己が身をかはす爲に相手が倒れる様に練習を積む事が必要である。即ち靈感を旺盛ならしめる爲になす術である。

人体の後は精神的に武術に働く様に来てゐる。そこで日々の練習を積ん

で靈感をますます敏感ならしめねばならぬ。是が出来たら相手がとりに来たら前に進む事に依つて相手が倒れる。

(二)後襟を掴まれることは後方に立つた敵が刀を真向に振りかぶつて切つて来るのと同じ理である。女なら髪を掴んで引倒すのと同じである。後襟をとられた時は速かに体をかはして相手の心を取りひらぐ爲に相手の面を打つか又面が水月を打つて相手の心の窓を叩いでしまふ。或は後から来た相手に速かに転換して相手の右横(或は左横)を突く様な姿勢に変ず。又相手の真後に転廻して右後から相手を攻める様にする。殊に腰の統一をはかり之を丈夫になす爲に練習をする。若し後捕りに於て面を打つてその手を相手に握られた場合は速かに左足引いて体を右にさけて切り下ろすか又右足を相手の左へ引いて相手を投げる。以上の解説は萬の技の一端にして全技に対しその奥義の詳しき解説は時を得て良修の際是を傳授す。

技法圖解並解說

練習上の心得

一本武道は一撃克く死命を制するものなるを以て練習に際しては指導者の教示を守り徒に力を競うべからず

二本武道は一を以て萬に當るの術なれば常に前方のみならず四方八方に対せる心掛けを以て練習するを要す

三練習は常に愉快に実施するを要す

四指導者の教導は僅に其の一端を教ふるに過ぎず之が活用の妙は自己の不断の練習に依り始めて体得し得るものとす 徒に多くの業を望まざり一つ一つ自己のものとなすを要す

五日々の練習に際しては先づ体の変更より始め逐次強度を高め身体に無理を生ぜしめざるを要す 然る時は如何なる老人と雖も身体に故障を生ずる事なく愉快に練習を続け鍛練の目的を達する事を得べし

六本武道は心身を鍛練し至誠の人を作るを目的とし業は悉く秘伝なるを以て徒に他人に公開し或は市井無頼の徒の悪用を避くべし

構 (基本姿勢)

気勢を充実に足を六方に開き半身入身合気の姿勢を以て相手に対す

總て構は時・位置・土地の高低・其の時の勢等に因り自然に起るものにして常に構は心にあるものとす

足の踏み方には外六方・内六方及び外巴・内巴あり

注意

練習に際しては相手の構、相手との向合を考へ左或は右の構を用ふ動作の終りし時兩足は常に六方に開きある如く練習するを要す

相手に正対するは隙多きを以て不利とす

座り業

正面

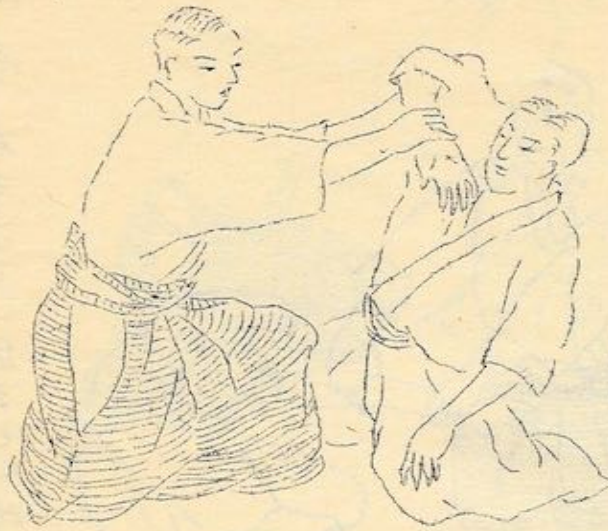
一

仕 右手で顔を打ち左で脇突く同時に腰上げる

受 右手で相手の右手を受けり

仕 相手の受けた右手首をとり左手で左肘掴み同時に左膝少し進めながら
右手引倒し左手で肘おさへる

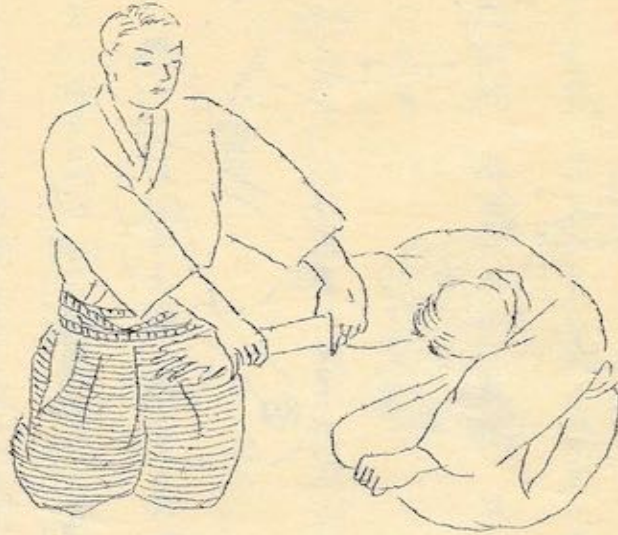
(一)



(二)



二 受 右手刀で打出すと同時に左手で突く



仕

打ち来る相手の右手
を右手で受けると同
時に右膝後へ退いて
左手で肘掴み右下
方に引き倒す

(二)





横面



仕 受

右手をもつて相手の横面を打つ

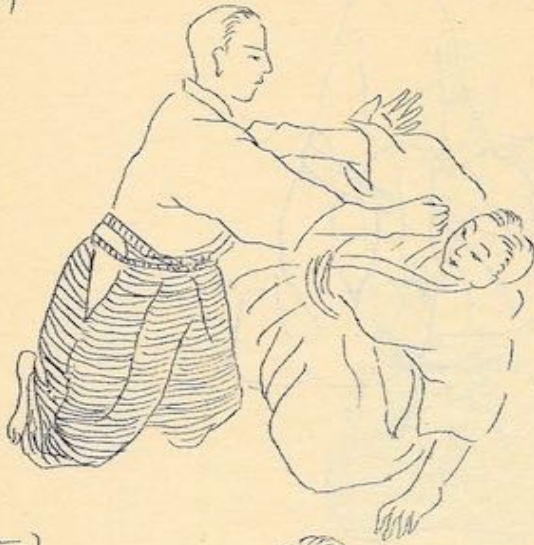
左膝思いきり左へより同時に左手で相手の右手を打ち右手で受の横面打ち倒す

肩

受 左手で相手の左肩を掴む
仕 右手で面打ち左で相手の右肘打ちながら左膝進み右手で相手の右手

をとって前方に押し倒す

(一)



(二)



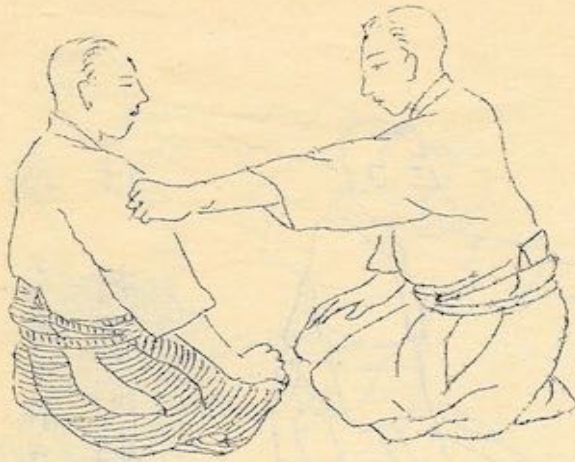
(三)



五

受 左手で相手の右肩掴み右手で打ち出す
仕 打つて来るのを右手で受け左手で肘ついて仰向けに打倒す

(一)



(二)



(三)



(一)



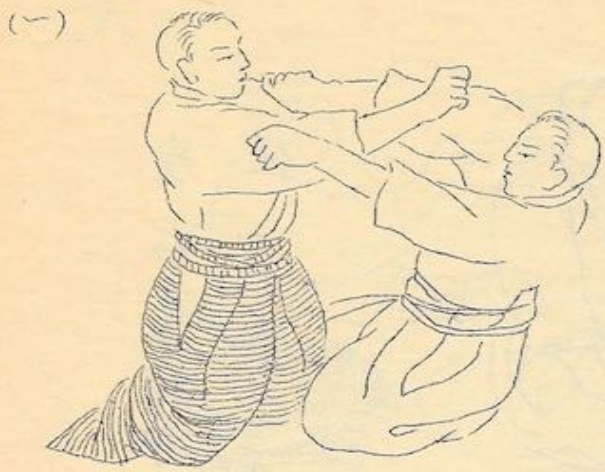
六

受
仕
右手で相手の左袖握む
持つと同時に右で面打ち左へ寄つて左で相手の左肘打倒す

袖

(二)





受 両手で相手の両袖を持つ
 仕 右手で面打ち左手で相手の右肘うって右で右手とり前方に
 打ち倒す

両袖

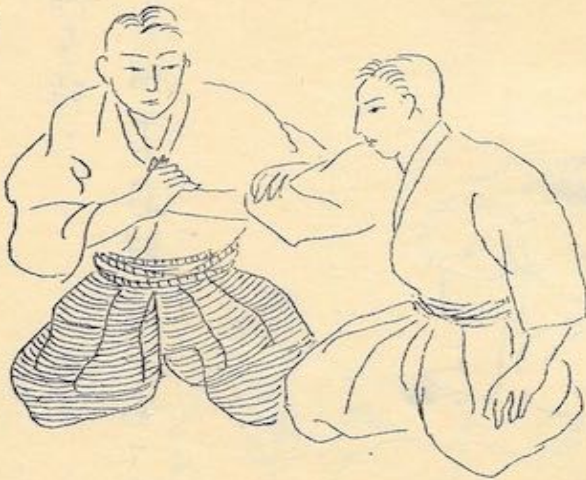
胸

受 右手で相手の胸を持つ
仕 つま先立って右で面を打ち同時に左膝進めて体を右に開く

(一)



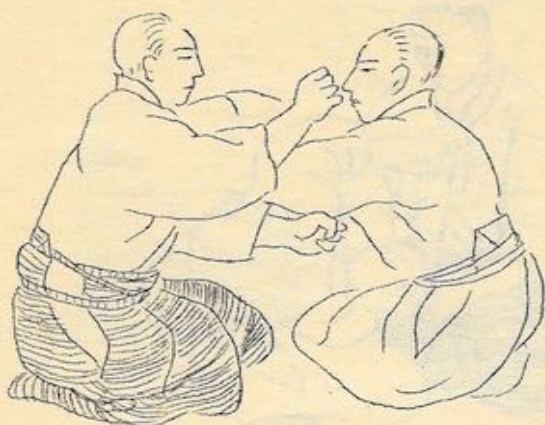
(二)



(三)



(一)



受 仕

相手の襟を絞りにとって首締める(右手上)
 右膝引きつゝ面打つて左手下から入れ相手の左手にかけ左手
 下に右手上からかけて頭をひねる

(二)



(三)



(四)

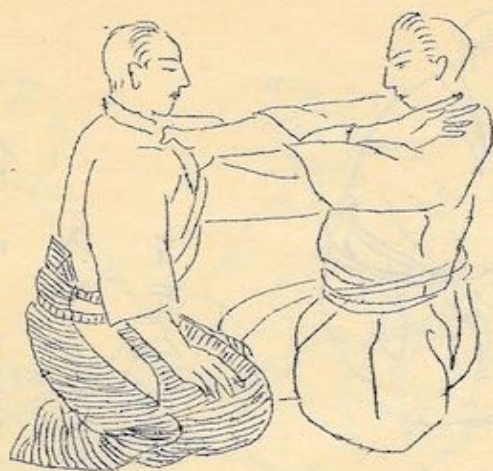


仕 受

前 同

左手上からかけ右手で自分の左手つかむ

(一)



(二)



(三)



十一 受 両手で相手の両手をつかむ

手

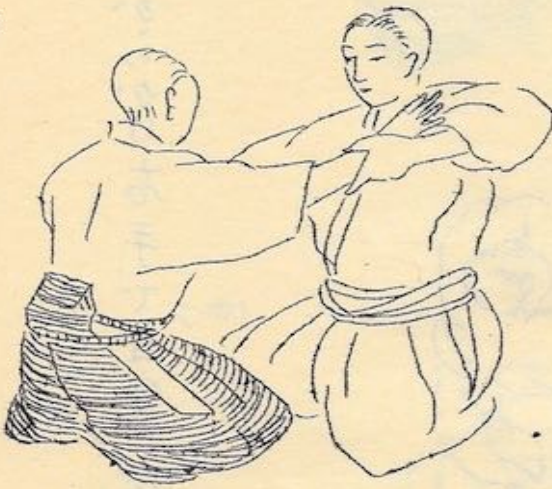
仕 掌を中に向け親指の見える位に立て手先に力を

入れて真直に向ふに倒す 左へ倒す時は右手
を充分のぼす

(一)



(二)



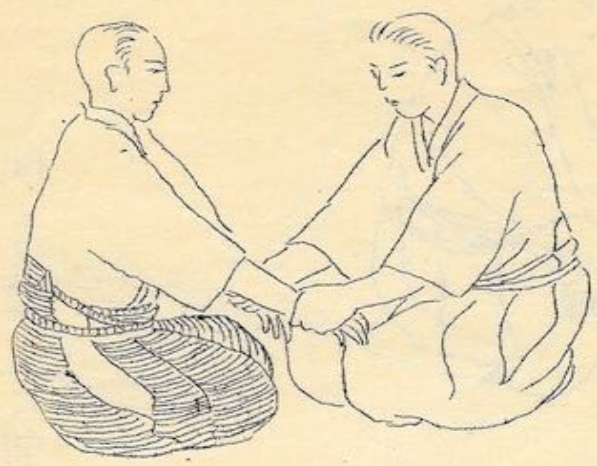
(三)



十二 受前同

仕 左手下へ引き右手相手の左肩へ向けて延ばし倒す

(一)



(二)



(三)



十三

受前同

仕

掌上に向けて真直にのびし左方に倒す

(一)



(二)



(三)



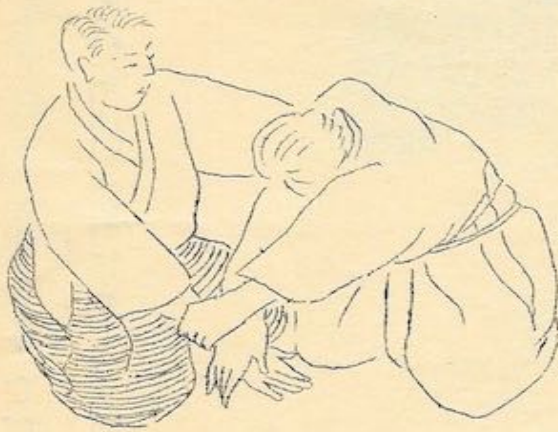
受前同

仕 右手相手の右手の上に乘せ右方にはねて左手はづして右
膝引き左手で相手の左袖引き倒す

(一)



(二)



(三)



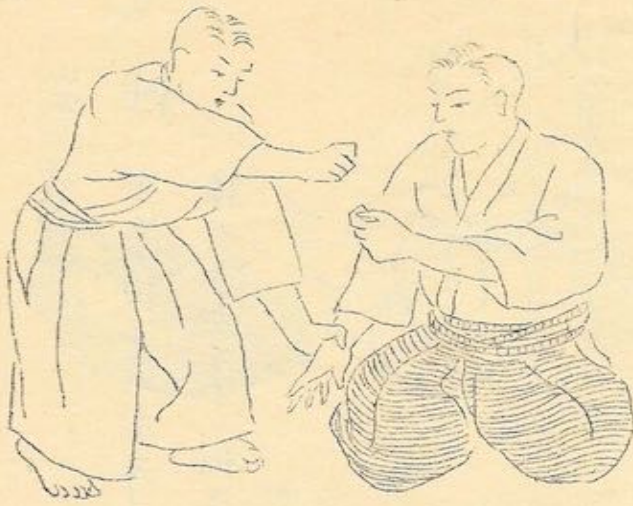
半身半立

十五

仕 受

相手の右横から左手で右手とり右手で打ち出す
引かれるまゝ、右膝進め同時に斜に右手あげ相手の左手首を

(一)



(二)

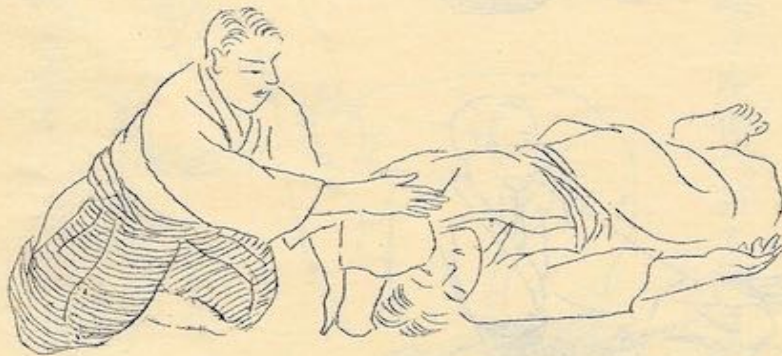


(三)

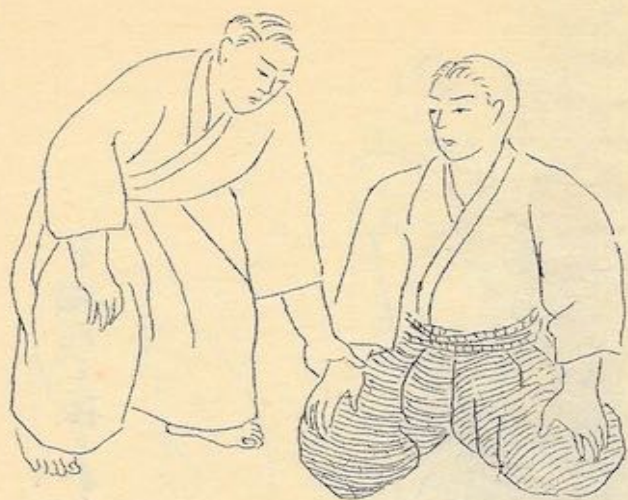


を掴んで振りかぶり頭に
つけぬ様にして左側に
うち倒す

(四)



(一)



(二)



(三)



十六

受 仕

左手で相手の右手横からとる
 右膝相手の後へ進め右肘で左膝押し倒し左手
 で左足頭掴む

十七

受 前同

仕

右手振りかぶると同時に右膝立て右前へ少し進め左手で相手の左手頤をもつて立ち上りながら廻り左側へ打ち倒す

(一)



(二)



(三)



(四)



十八

受 前同

仕

右膝一寸進め左手で相手の左足頰掴み右手で膝掴んで押せ
倒す (膝を持たずにたき倒してもよい)

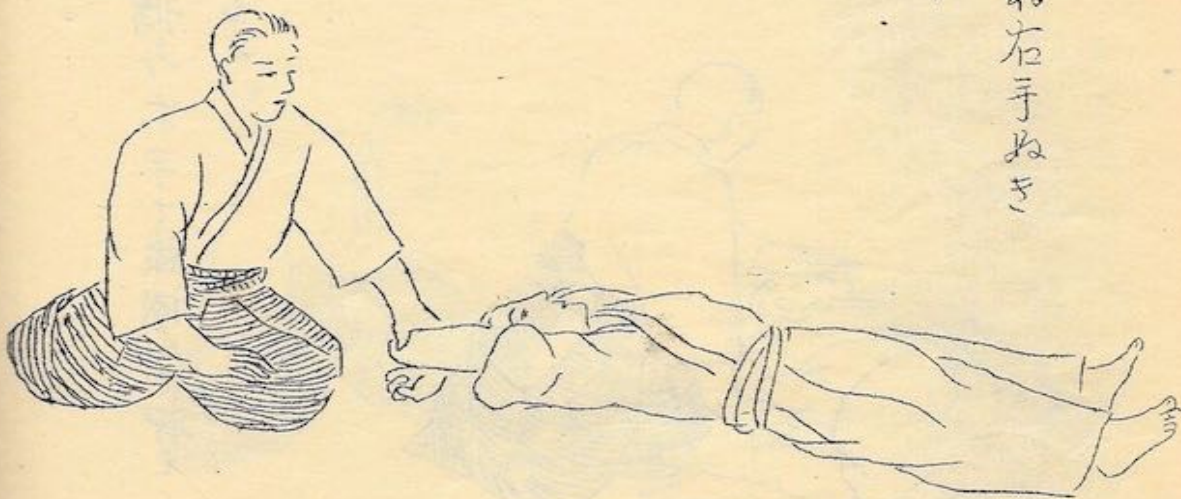
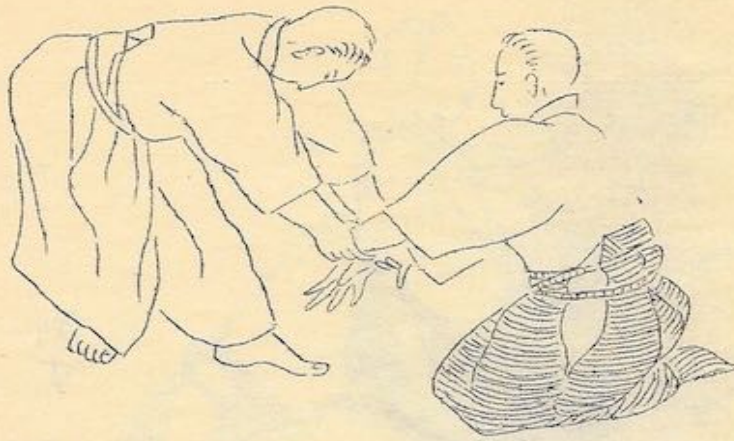


十九

受前同

仕

左手相手の左の上にかけて左方に跳ね右手ぬき
とつて胴をつき右袖引いて打ち倒す



二十

受 前同

仕

左手で相手の左手を持ち右手前へつき出しながら振りかぶり
 右膝あげて前にまわしつま立ち廻りながら立ち上つて
 後方に倒す

(一)



(二)



(三)



(右手相手の右手にかけ右足出して左手抜きとり立ち上つて左手相手の手の上に伸し左足相手の後へ進める)

(四)



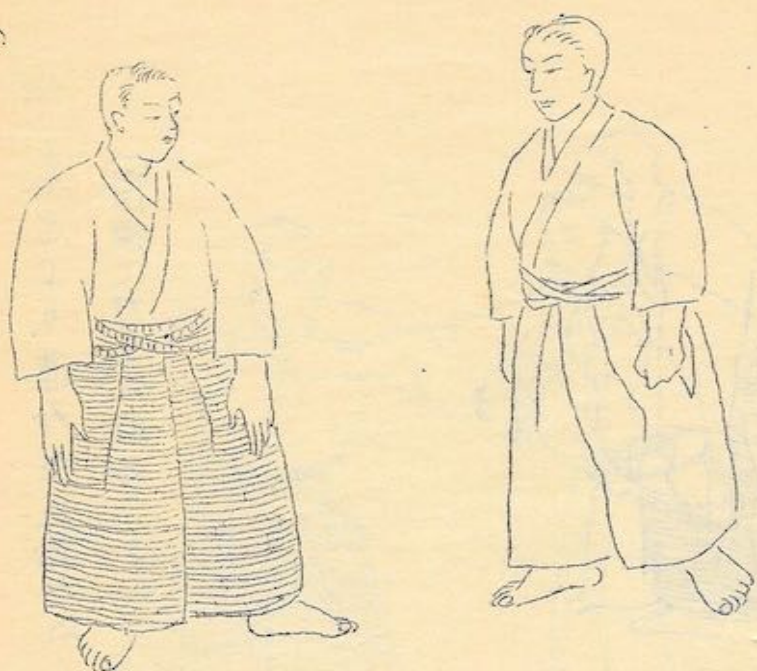
二十一

立業

正面

仕 右手を以つて打ち出し左で相手の右脇を突く
受 右手で之を受ける

(一)



(二)



(三)



仕
右足より進み左足踏み込んで左手で相手の右肘つかむ
(指頭に力を入れること)

(四)



二十二

受 右手を以つて打ち出す

仕 相手の振りかぶつた時にはいる氣持で之を受け左足引い

て体を開き相手の右手つかんで引き倒す

(一)



(二)



二十三 受前同

仕 左足大きく後へ引き、右手相手の首へ切りおろし前へ押し

倒す（或は左手で相手の右手又は右袖をひくもよい）

(一)



(二)



(三)



(107)



四十九



(一)



二十四

受 右手を以て正面を打

仕 左足進め入身になり相手の右倒れ入りつゝ左拳を以つて

脇を突き右手で相手の手刀を切りおろす

(二)



五十

(三)



更に深く相手の後に廻りつゝ左手にて後衿をとり右足を踏みこみ相手の頸を強く押しして或は右前臂をもつゝ首を押し下けて倒す

(四)



横面

仕 受

右手を以つて横面をうつ

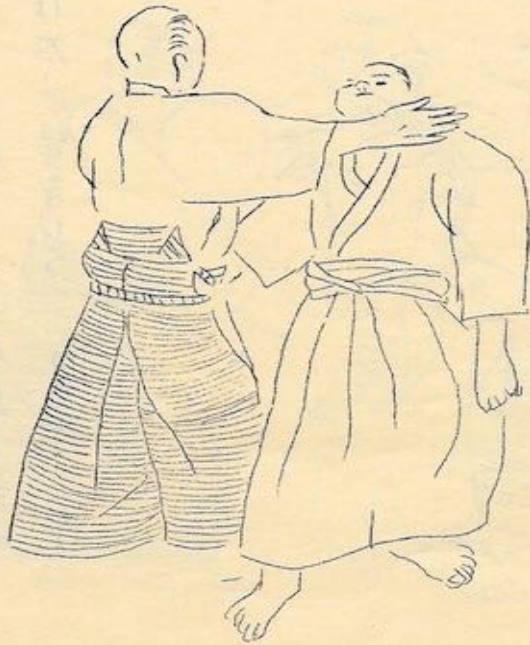
左足左方へ出で左手で相手の右手を切り下しえさつかみ右手で

首へうちおろす

(一)



(二)



(一)



二十六

受前同

(二)



五十三

(三)



仕
左手で受け左足引き右で回をうつ
両手で相手の右手を
もち左足進んで喰入り右足進んで打ち倒す

(四)



受前同

仕 左足引くと同時に左膝つき右手で相手の左脇打つ左手で相手の
右袖掴んで引き倒す

(一)



(二)



二六

受前同

仕

左足進め左手にて受け同時に右手で相手の面を打ち
直に相手の右手切りおろし深く相手の後にまわり袷をとる

(一)



(二)

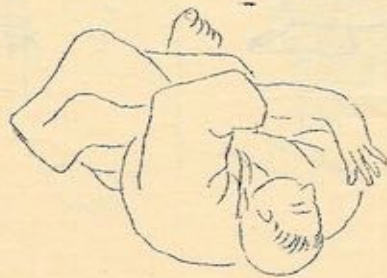


(三)



右足進め右前臂を以つて相手の
首を押し下げて倒す

(四)



(一)



二十九

肩

受 右手を以て相手左肩搦んで引く

仕 右手で面打ち相手の右手搦んで左肩で押し出す様に

左足進んで左手で相手の右肘搦んで

前へ倒す

(二)



(一)



三十

受 左手で相手の右肩つかむ

仕 左足より進み右足相手の後へ踏みこみ右肘から相手の首の

前へのばす

(二)



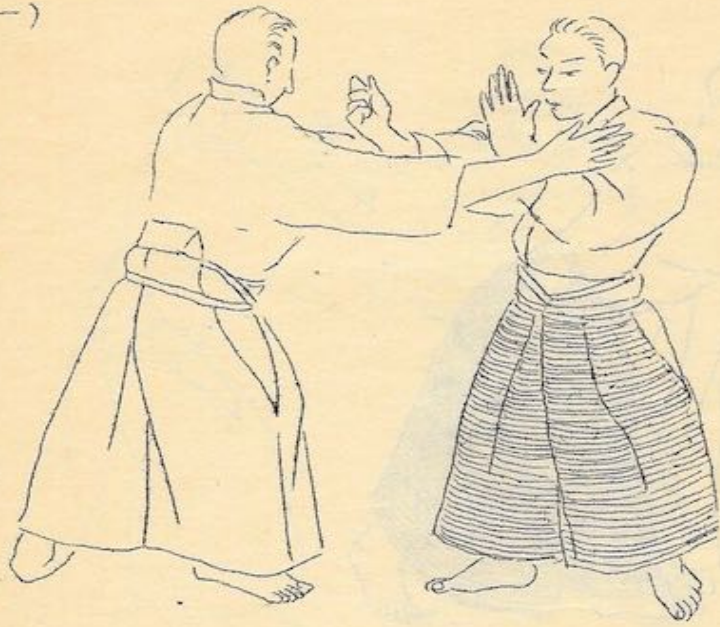


三十一 受 左手で相手の右肩を持ち右手をもつて打ち出す

仕 左手で受け右足相手の足の間へ進め頭を深く下げて
頭を越して後方になげる



(一)



(二)



三十二 受 左手で相手の右肩を持ち右手で横面打ち出す

仕 左で受けて右で溜を打ち両手で相手の右手を持ち左足進む

(三)



手の下をくぐり前方へなげる

(四)



六十二

三十三

受前同

仕 左手で受け、右で持ち直し、右後方に引きよせ、同時に左足一步
進んで右手をけなす

(一)



(二)



(三)



たおす

右手を相手の首へ巻き右足相手の後方へ踏みこんで前方へおし

(四)



三十四

受前同

仕 右で面を打ち左で相手の右手掴み左足引いて

後へまわる

(一)



(二)



袖

受 左手で相手の右袖をもち引く
仕 引かれるまゝ、両手刀で肘を押し上げながら進み

(一)



(二)



(三)



左手で相手の左手掴み右足相手の前へ進んで右手で肘へ切りおろす

(四)



三十六

受前同

仕

引き

右手で受けそのまゝ、まきこんで左で相手の左袖

(一)



(二)



六十八

(三)



右足引いて膝つき引き落す

(四)



仕 受 前同

左足左方へ出て右手で受け指頭に力を入れ首の前からのばし掌外へ向けてまき込み左手で後衿首掴んで引く
 右足更に相手の後へふみ込む（うつて来るのを右手で受けて右足ふみこめぬ時は左手で相手の左袖つかんで右足後へ引く）

(一)



(二)



三十八

受 左で相手の右袖つかむ

仕 右足より相手の後へ進み右肘で面を打った手で相手の左手つかむ

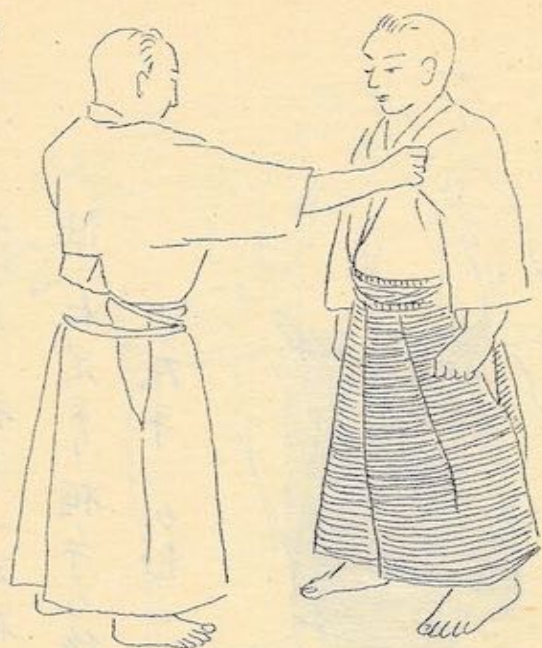
(一)



(二)



(一)



三十九

仕 受

前同引く

同時に右足相手の横脇へ出し右手で面を打ち
つゝ左足更に深く相手の後へ進み右手で切り下す

(二)



七十二

(一)



四

受 左で相手の右袖をもち右手で突き出す

仕 右足で相手の左足をふんで右手上から相手の肘にかけ左足

後へ引く

(二)



(一)



單一

受前同

仕 右手内から外へまわして相手の袖を掴み右足相手の
 後へ進め左足更に踏みこんで左手で頸を押す

(二)



四十二 受

前同 打ち出す

仕

左で胴打ち右足後へ引きなかり右手上からまわして相手の左袖とつて引く



(二)



(左足前へ進め腰投げ頭深く下げて左足相手の足の間に入水てもよい)

両肩

(一)



受 両手で相手の両肩をつかむ
仕 左で相手の面を打ち右足横向きに進め左足相手の
の後ろへ踏み込む

(二)



(三)



上体を真直につつこみ相手の手の下をくぐり左肘で相
手のあばらぎを打つ

(四)



一)



四十四

受 前同

仕
 右手で面を打ち左へ肩を引き左足相手の左横へ進む

二)



七十八

(三)



相手の手の後へ頭をくぐり右手で顎押すと同時に左足深く
相手の後へ踏みこむ

(四)





四五

入身

手 (片手)

受 右手を以つて相手の左手腕を握る
仕 左指頭にかをいれ掌上に向けて斜右につき出し左足より受の体に近く右側に深く入り後方に注目しつゝ右手にて相手の右手を下からとる



八十

(三)



受の右手より左手を脱して面を打ち右足をふみこみつゝ右前臂を以つて首をおし下り倒す 此時右手の指先にかを入水腕を内側に向けりようにする

(四)



四十六

体の變化

仕 受 前同

左手先にかを入れ右前方に羊角形に突き出しつゝ掌を上
に向り左足を軸とし大きく右に転廻し後方にとる

(一)



(二)



四十七

受左手で相手の右手頤掴む

仕もたれたら直ちに右足から進み相手の後へ踏みこみ

右手をのばす（相手が足を引いたら左足ふみこみ左手で受の右袖引く）



四十八

受前同

仕

左足から相手の前へ進め同時に右手相手の首の前へはし
右足相手の後へ踏み込み左手で相手の右手押へて右真
下或は後方へ押倒す（左手でもちかへ右手で相手
の首をかへこんでもよい）



四十九

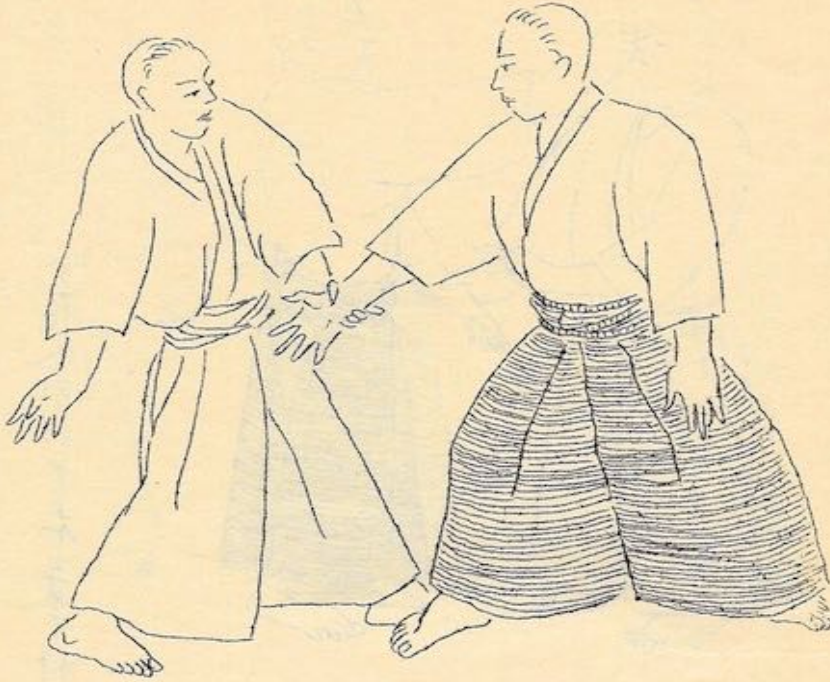
受前同

仕

左手で面を打ちその手で相手の右手をとり同時に左足
後へ引いて右手で肘をおさへて突き倒す



五十 受前同引く



一

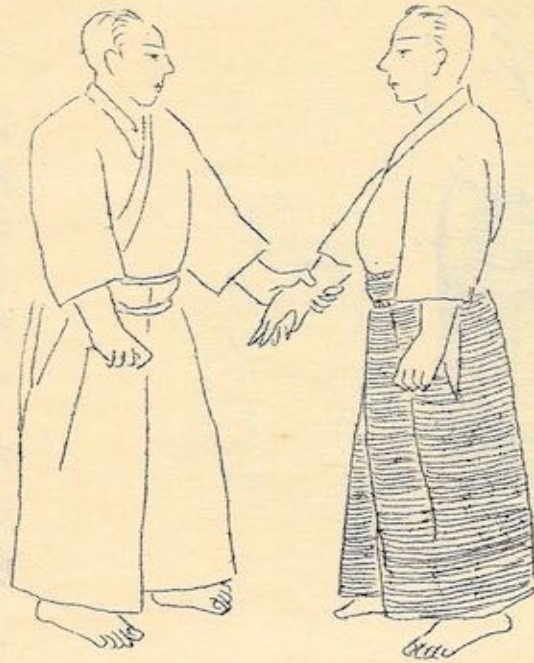
仕

左で面打ち右手グツと突き出し
右足踏みこんで相手の左足ふみ
右手で腰おし左手で首おさへ
る



(二)

(一)



五十一

受 左手で相手の右手頭をつかむ

仕 左足相手の前へ進め右手内から上げ相手の首の後へ

廻す

(二)



(三)



右足更に相手の後へ進め、左手を首の前から廻し、右手で後衿首を引いて左足更に深く進む。

(四)



五十二

四方投げ

仕 受

前同

左手振りかぶると同時に左足進め右手で相手の右手頸を持つてうち倒す

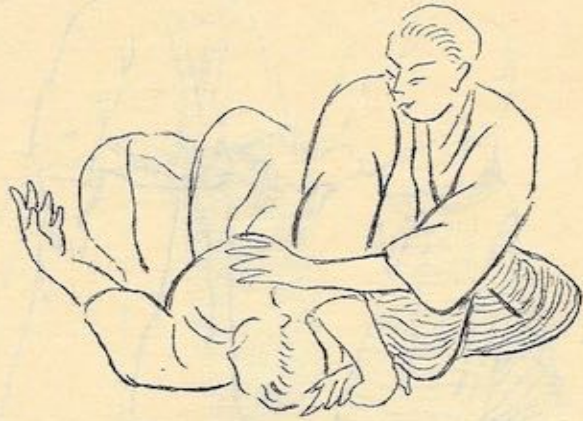
(一)



(二)



(三)



(前後左右いづれの方角にも投げれる様に練習する)

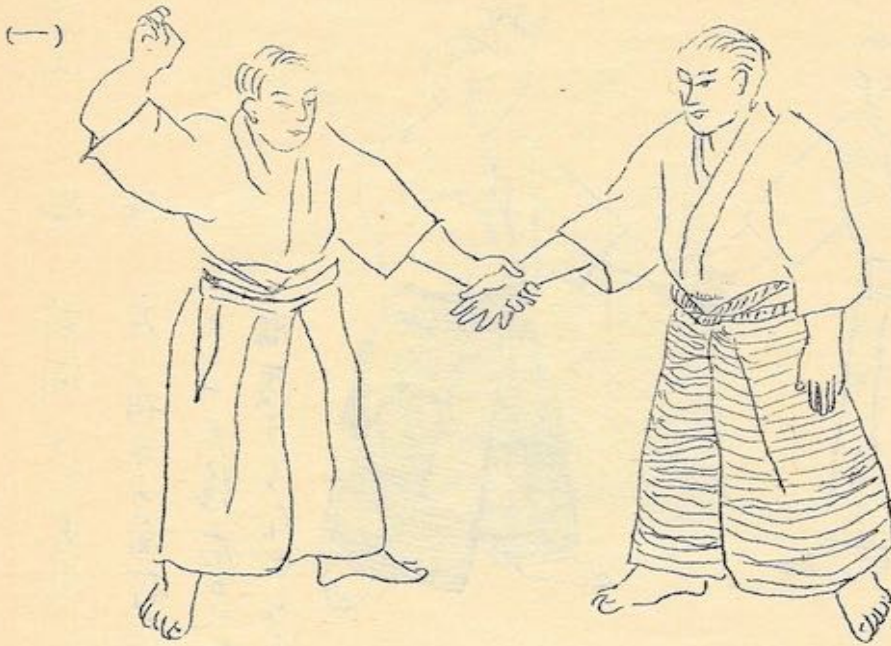
合氣投げ

受 受 前同

仕

一、引かれた時、引かれるまゝに右足相手の前左へ
進め同時に右手同じ方向に突き出す

二、そのまゝの時左足後へ引いて右手前下へ
つき出す（相手が手と離しけうそのまゝ前
から左手後から廻してどき上げる）



(一)



五十四

受

前同うちあす

仕

左で相手の面打ちながらくぐり左で肘つかんで投げる
(くぐった後右足相手の後へ踏みこんで右肘で相手の
脇復うちながらうち倒す)

(一)



(二)



五十五

両手

受 両手で相手の両手とる

仕 一相手と同じ側の足が出ている時は後足大きく後へ引いてまわる

ニ 相手と反対側の足が出ている時は後足一步進めてまわる

(一)



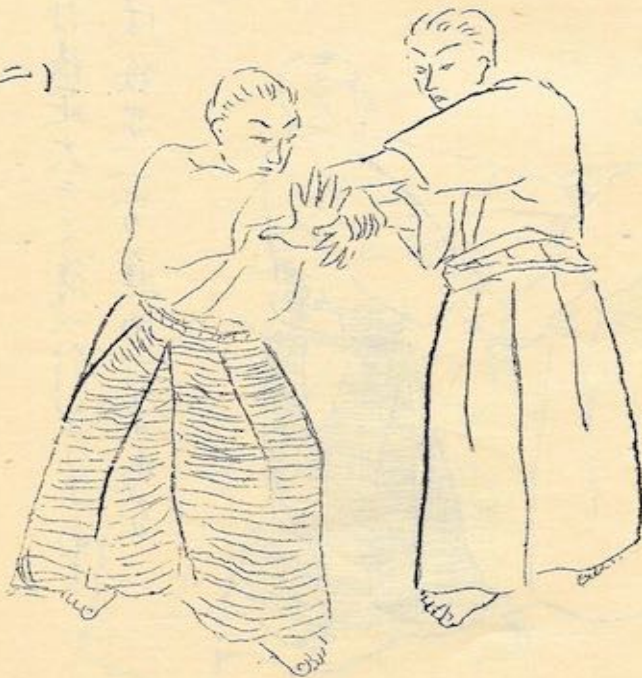
(二)



(三)



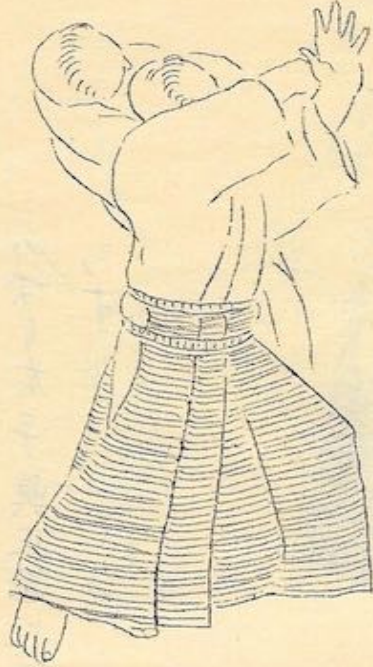
(二)



四方投げ

足は前と同じで(一)の場合は右手で相手の右手をつかんで振りかぶる。(二)の場合も同様右手で相手の右手をつかんで振りかぶりながらう後へ廻り切り下ろす。

(三)



(四)



五十六

受前同

仕 左足より進み右足相手の左後(自分から見て)へ進み左手
のばし右手真正面に振りかぶりつゝ進んで首へ切りか
ろす

(一)



(二)



五十七

受 前同

仕

右足相手の前へ左手つき上げて首の向ふ側へ押し気味
に突出す左足は相手の後方へ進める左手は掌を上へ
向ける

(一)



(二)



五十八

受前同

仕 右手外からまわして引きつり込み右足一步進んで
腰なげをかける

(一)



(二)



九十八

五十九

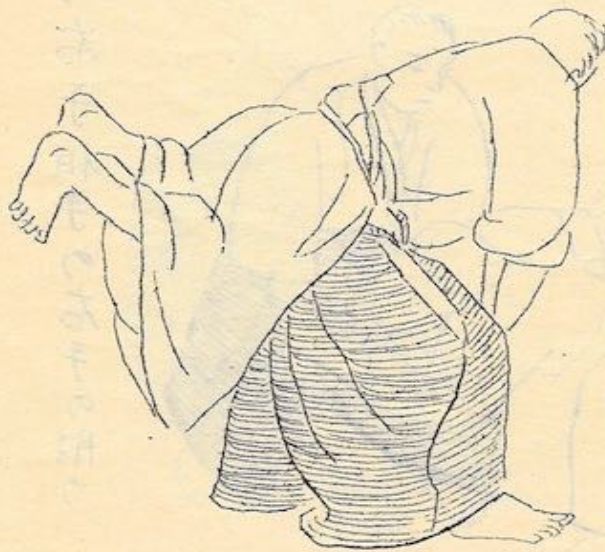
受前同

仕 左足引い、腰投げ

(一)



(二)



九十九

六十

受前同

仕 右足相手の左横へ進めながら右手相手の右手の肘の
上から斜前につき出す

(一)



(二)



(一)



胸

六十一

掌右手で相手の胸元掴んで引く

仕右手で面うち掴んだ手をとって腰を一寸さげ引かぬまゝに
 左足深く進み左手相手の肘関節にかけておし長おす

(二)



(三)



(四)



六十二

受前同押す

仕 右足引いて右で面を打ちながら右手で相手の手を上
からとり体をかじめる様にして左手で肘関節をつか
んで引く

(一)



(二)



六十三

受

左手で相手の胸元をとる

仕

面打ちながら左手で相手の左手掴み左足引いて
右手で胸をかへて右足相手の前へ進む

(左足ひいて左で相手の左手掴み右肘関節にかけ左手で後衿首
掴み直し右で腰押す面打つ時右足少しおへよる)

(一)



(二)



六十四

仕 受

前同右で打ち出す

右手外からまわし右足進んで右手真直に相手の
首の前へのぼす(或は右手其のまゝ内から真直のぼす)

(一)



(二)



六十五

受前同

仕

うつて来るのを右手で受け左足一歩出て体を開き
右手相手の肩へ切りおろし右足更に進む

(一)



(二)



六十六

受 前同

仕

右で受け右足引いて左手で相手の左袖つかんで引く

(一)



(二)



百七

六十七

胸と手

受 左で相手の手頷を持ち右手で胸元つかむ

仕

引かれたら引かれるまゝ掴まれた手振りかふる様にして
左足より進み右足相手の後へ進んで切りおろす



卒八

受前同

仕

右手外からまわしいきながら左手で袖引いて左足より進み右足一歩はいつて左手で相手の左袖搦んで引く

(一)



(二)



二
九

受 前同

仕

右手持たれた瞬間左斜前へつき出し左足進んで
左手でとりなほし右手で相手の右袖つかんで右足
進む



七十

受前同

仕 右足相手の後へ進み左手で相手の左手持ち直し右手はな
して後衿首つかみ左手真直のはして首かへこむ

(一)



(二)



七十一

首締

受 両手で綾にとつて首しめる
仕 右手で相手の左袖引いて右足充分引き左で胴うつ

(一)



(二)



七十一

受前同

仕 (イ) 右で面打ちながら左足一寸引いて左から相手の手をくぐり
そのまゝ、両手を真直ぐのばす

(一)



(二)
(イ)



(三)
(四)



(四) ぐいってから右手を外に出し
胴を打つ

(五)
(六)



(六) 同様右手を出して帯を掴んで
フリ上げる

七十三

受前同

仕 左手下から入小相手の左腕にかけ右手で頭押へ同時に

右足進む



(一)

(左足引いて面うちながら左手で相手の右袖もちながら右側からは入り
右手で首おさへる)

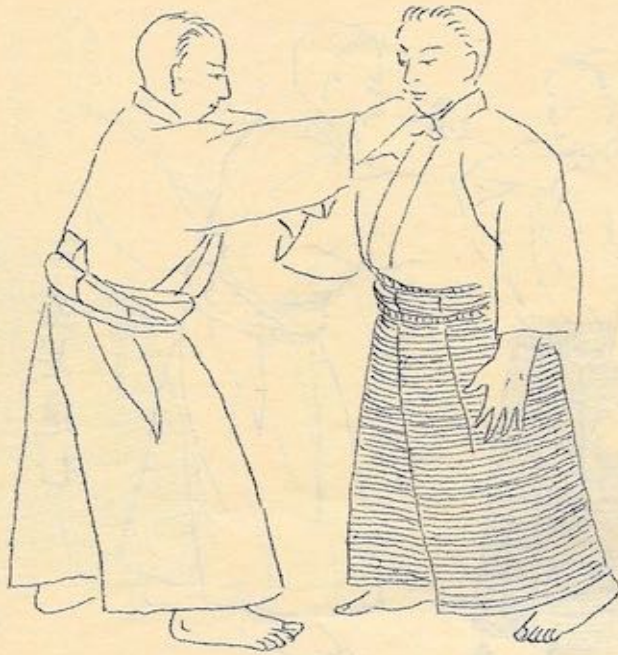
(二)



七十四

受前同

仕 右手下から入水相手の右肩に向けて充分のぼし切り下す
右足は相手の左後方に進める

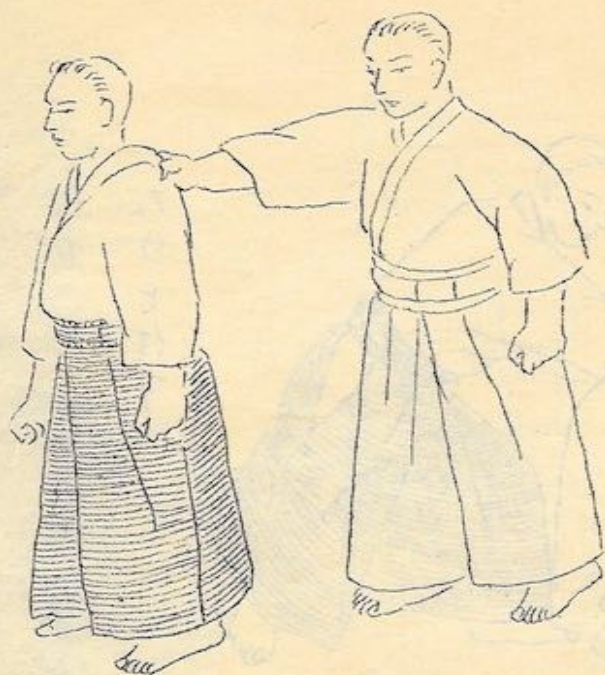


七十五

後業

後衿

受
仕
右手で相手の後衿をつかむ
右足真後へ引きつ、右手振りかぶり左で相手の面うつ



(一)



(二)

(三)



左足大きく後へさがり相手の手の後へぬけて
 右手で相手の右手をとり左で右
 肘おさへて左足再び進み前方に
 なげとばす

(四)



七十六

受前同 仕の打つのを左手で受ける

仕 右足一す引いて左で面をうちつかまれたまゝ、左足相手の後へ
引き、左手真下へ切り下す

(一)



(二)



七十七

受前同

仕 相手の後衿を取らんとするや右足を軸として右に廻りつゝ、
相手の右後方に入り右手刀を以て相手の右手を打ち下ろす
次でお足を相手の後方にふみ込み、右手を以て相手の
面を打ち倒す



(一)



(二)

七十八

受前同

仕 左で詞を打ちながら左足引いて左へまわり右足更に
ふみこんで右手で顎をおす



3

(二)



百三十一

1)



(二)



七十九

受

肩

両手で相手の両肩握む

仕

左手頭上に振りかぶり頭を覆ふ様にし同時に左足半歩進む

(三)



腰をさげ、右に廻転した左足相手の後へ進め同時に左肘又は
両手を充分のはして相手を左後方へ投げとばす

(四)



(一)

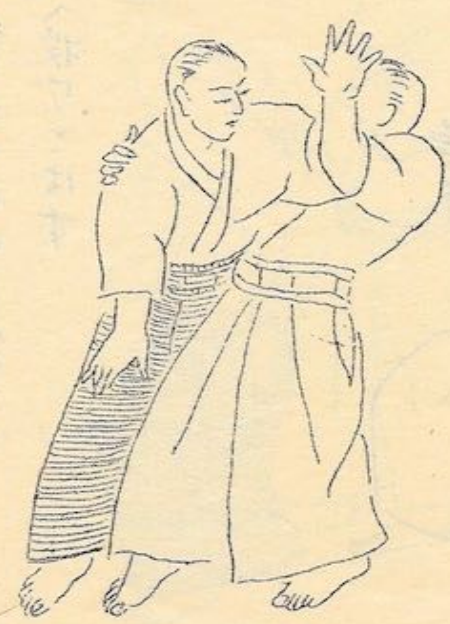


八十

受 前同で引く

仕 同時に右足一寸下り左足相手の後へ引き同時に左肘で相手の水月をうち倒す

(二)



八十一

受前同でおす

仕 七十九と同じ要領で廻り右足はいり左手で顔をささへ(右手

を胸うつ



(一)



(二)

八十二

受前同

仕 左足相手の右後へ引き左上から右手足の下から入水
だきあげる

(一)



(二)



腕

八十三

受

両手で相手の両上腕をつかむ（前へおす）

仕

右手振りかぶり右足進めて左に転じ右手で頸を押へ左手で相手の

左袖引く



八十四

受前同

仕 右足相手の左後に引き体を引き左手で相手の左手おさへて
自分の胸につけ右手で相手の左肘おして前へ倒す



手願

八十五 受 両手で相手の両手願を後から握む

仕 右足後に引き、右手頭を越して前へまわし左足相手の
後へ引く

(一)



(二)



(三)



(177)



左手で相手の右肘つかみ左足更に前へ進みおし倒す

八十六

受前同

仕

右足前から左にまわし同時に右手をあげて左に
まわり

(一)



(二)



(三)



右足相手の後までまわり両手をのびして相手をそりかへらせ
仰向に倒す

(四)



八十七

受前同

仕 左手前下へ誘導し右足後へ引く

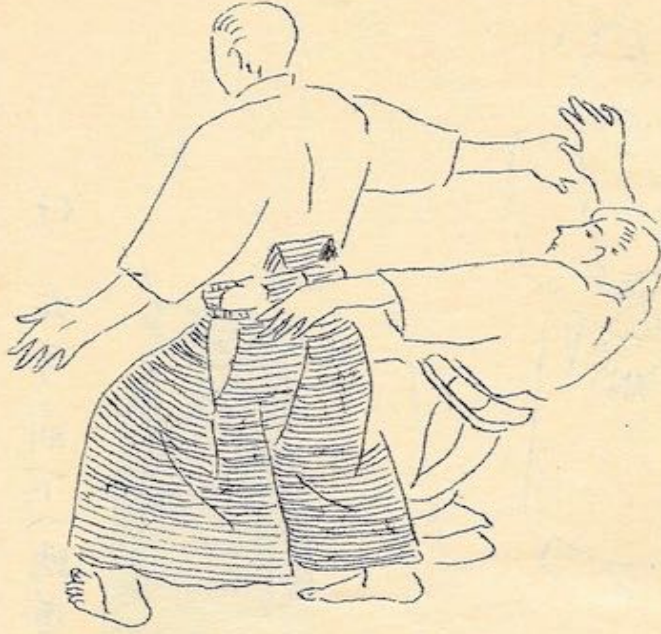
(一)



(二)



(三)



右手相手の右後へまわし体をかたむけ右
後方に倒す

(四)



百三十六

八十八

受

両手で相手の両手首を下からもち上る

仕

右足相手の左後へ下り左手腰につけ右手のばして
相手の胸元へ切りおろす



(二)



昭和十一年四月八日

植芝康悦



東京新宿区若松町一〇三

昭和廿九年四月一日印刷
昭和廿九年四月十日發行

(非賣品)

著者 植芝康悦

發行所 財団法人合気会

東京都新宿区若松町一〇三

電話 (34) 八〇三八

不許
複製



